

社会科固有の学びを育てる授業構成と実践分析 (Ⅲ)

— メタ認知・メタ評価の視点を手がかりにして —

原 田 智 仁 岩 田 一 彦

(兵庫教育大学)

渡 信 雄 高 岡 昌 司 井 上 良 典

(兵庫教育大学附属小学校)

本稿は、社会科授業の開発と分析を通して、「社会科固有の学び」とは何かを解明しようとするものである。

われわれは、本継続研究を始めるにあたり、「社会科固有の学び」について以下の3つの仮説を立てた。

- 1) 社会科に固有な「認識の枠組み」とは、個々人の先入見ではなく、対象に即した理論仮説である。
- 2) 社会科に固有な「認識の方法」とは、専心的な体験・表現活動ではなく、分析的な探求活動である。
- 3) 社会科に固有な「認識の結果」とは、主観的知識の増殖ではなく、客観的知識の成長である。

上記の仮説に基づき、第3学年の授業「わたしたちのくらしと商店—お店グレードアップ計画を提案しよう—」を開発し実践した。今回は、特にメタ認知・メタ評価に注目して学習活動を組織し、分析・評価した。その結果、学習過程にメタ認知・メタ評価の活動を適切に組み込めば、社会認識も深まることが明らかになった。

キーワード：社会科固有の学び、授業構成、メタ認知、メタ評価、商店

原田 智仁・岩田 一彦：兵庫教育大学・社会系教育講座・教授，〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1

原田 (toharada@soc.hyogo-u.ac.jp)，岩田 (ywata@soc.hyogo-u.ac.jp)

渡 信雄・高岡 昌司・井上 良典：兵庫教育大学・附属小学校・教諭，〒673-1421 兵庫県加東郡社町山国2013-4

Development and Analysis of Social Studies Lesson for Promoting the Learning Peculiar to Social Studies(Ⅲ) : from Viewpoints of Meta-cognitive Skills and Self-evaluation

Tomohito Harada, Kazuhiko Iwata,

(Hyogo University of Teacher Education)

Nobuo Watari, Shoji Takaoka, and Yoshinori Inoue

(Attached Elementary School, Hyogo University of Teacher Education)

This article explores the learning peculiar to social studies through the development and analysis of social studies lesson.

The hypotheses in this research are as follows.

- 1) The frame of reference peculiar to social studies is not personal but theoretical.
- 2) The method of inquiry peculiar to social studies is not synthetic but analytical.
- 3) The acquired knowledge peculiar to social studies is not subjective but objective.

Based on these hypotheses, we developed a lesson plan of "Our Life and Stores" in the 3rd grade, then practiced and analyzed children's reflective cards. As a result of this research, it has been made clear that the growth of social cognition are connected with meta-cognitive skills and self evaluation.

Key Words: learning peculiar to social studies, lesson construction, meta-cognitive skills, self-evaluation, stores

Tomohito Harada, and Kazuhiko Iwata, are Professors of Department of Social Science, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1494, Japan

Nobuo Watari, Shoji Takaoka, and Yoshinori Inoue are Teachers of Attached Elementary School, Hyogo University of Teacher Education, 2013-4, Yamakuni, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1494, Japan

1. 問題の所在

1.1 継続研究の成果と課題

新教育課程に「総合的な学習の時間」が導入されたことをきっかけに、改めて社会科とは何か、社会科固有の学びとは何かが問直されている。そうした問題意識の下に、本継続研究は社会科固有の学びを育てる授業構成のあり方を、具体的な授業開発と実践分析を通して明らかにしようとするものである。

研究Ⅰ¹⁾では、まず社会科固有の学びに関する我々の基本仮説として、①社会科に固有な「認識の枠組み」とは、個々人の先入見ではなく、対象に即した理論仮説である、②社会科に固有な「認識の方法」とは、専心的な体験・表現活動ではなく、分析的な探求活動である、③社会科に固有な「認識の結果」とは、主観的知識の増殖ではなく、客観的知識の成長である、の3つを設定した。

そして、仮説に基づき第5学年の単元「自動車工業と私たちの暮らし」を開発、実践した結果、子どもの大半が我々の想定した社会科の学びを深めていることが明らかになった。だが、社会科としての授業設計論が曖昧であったため、社会科固有の学びを育てる授業の要件を具体的に示すことができなかった。また、仮説に掲げた3つの視点相互の関係、すなわち社会を捉える枠組み・方法・結果の各視点がどのように作用して社会科固有の学びを生み出しているかを吟味するには至らなかった。

そこで研究Ⅱ²⁾では、「総合的な学習」と異なる社会科固有の学習過程を、自己(=私)から対象(=社会)への視野の拡大と捉え、第6学年の歴史単元「『現代』とはいつのこと？」を開発した。すなわち、まず自分史を作成し、時期区分することを通して、歴史には多様な見方や区切り方があることに気付く。次に、現代とはいっから始まるのかを調べ、いくつかの有力説とそれぞれの根拠を認識する。そして、それらを参考に各自の説を固め、討論を通して主観的な見方を超えた合理的で普遍的な時代区分を把握する。最後に、日本史の全体を、教科書とは異なる独自の方法で時代区分し、その成果を年表に表現するというものである。

実践分析については、学級全体の動向を把握することとは別に、社会科らしい学びができた子とそうでない子に着目し、それぞれがどのような枠組みと方法で社会を捉え、どういう質・量の知識を習得しているかを、より綿密に把握することに努めた。その結果、調べ活動の過程で多量の情報を獲得できた子ほど客観的な歴史認識の枠組みを構築し、社会科ならではの学びを身に付けたこと、他方、個々の子どもの関心や認識レベルに応じた指導ができない場合、当初は旺盛な社会的関心や追究意欲を示した子も次第に関心を低下させ、認識の深まりが見られないことなどが明らかになった。

なお、課題として以下の2点が残った。いずれも社会

科らしい学びを促す方法に関わる課題である。

第1は、子どもの主体的な調べ学習に任せることの限界である。子どもは、現代の始期に関する情報を求めて、教科書やインターネットなどを検索したが、そこで得られたのはほとんどが日本国内で一般化した1945年説であり、時代区分をめぐる対立と緊張の一端に触れさせることはできなかった。やはり教師の側に、日本とは異なる外国の説を示す資料を提供したり、専門家の意見を聴取させるなどの工夫が必要であろう。

第2は、メタ認知・メタ評価の弱さである。いうまでもなくメタ認知・メタ評価とは、自己の認知そのものを対象化し、評価することである。本研究およびそれに先立つ「関心・意欲」の継続研究³⁾においても、常に「ふりかえりカード」を利用して、子どもにメタ認知・メタ評価を求めてきた。だが、それは「今日の学習で分かったことは何か?」、「もっと学習したいと思うことは何か?」といった漠然とした評価に留まり、目標に照らして、何をどこまで明らかにしえたのかを吟味・反省させるものではなかった。それゆえ、メタ認知・メタ評価を次の学習に生かし⁴⁾、学びをさらに深めるための手立てを考察することが今後の課題であろう。

1.2 本研究の特質と意義

上記の課題を踏まえ、本研究Ⅲではさらなる研究の深化を目指した。本研究の特質と意義は、次の3点にまとめられる。

第1に、スーパーや個人商店など、地域の商店の販売の工夫をつぶさに調べ、それを基に「お店グレードアップ計画」を学級全体で練り上げさせることで、消費者の視点に立った「商店」認識を深めるとともに、地域社会の成員として商店街の活性化の方途を探ろうとする関心・意欲・態度を育てようとしたことである。

第2に、メタ認知・メタ評価の視点を導入するために、「ふりかえりカード」の質問を工夫したことである。従来の項目に加え、「これまでの学習でよくわからないこと・疑問・質問・不思議に思っていることは何か」、「それについてどうやって解決するか」、「次の学習では、どんなことを調べたり話し合ったりするか」を継続的に書かせることで、自己の学習を反省しつつ、学習に見通しを立てる習慣と能力を育成しようとした。

第3に、メタ認知・メタ評価の力を育て、適切に把握するため、認識対象に関するイメージ・マップの描き方に工夫を凝らしたことである。つまり、「商店(の様子、工夫、秘密)」について、単元開始前に描いたイメージ・マップの上に、小単元毎に新たにイメージを描き加えさせることで、絶えず自己の学習状況をモニタリングすることを可能にし、メタ認知・メタ評価を学習の深まりに生かそうとしたのである。(原田 智仁)

2. 授業構成のねらいと実際

一第3学年 『わたしたちのくらしと商店

～お店グレードアップ計画を提案しよう～』の場合

2.1 教材解釈

本単元に先立って行われた「ステラパークグレードアップ計画」の学習では、社町内にある未完成の公共施設ステラパークに対し、自分たちの考えを提案していこうと未来予測の学習を行った。その中で、建設者である社町役場の人に話を聞いたり、町の人にインタビューしたりして調べ活動を進め、クラスとしての提案を行った。公共性を柱として話し合う中で、自分たちだけの願いからステラパークを利用する様々な人々の願いへと視野を広げていく姿が見られた。これらの学習を通して、子どもたちは地域社会の様子を自分なりに捉え、その中にある自分というものについて考え始めた。

本単元「わたしたちのくらしと商店～お店グレードアップ計画～」では、スーパーマーケットなど地域の商店を取り上げ、消費生活・販売活動の工夫や物の結びつきを学ぶ中で、自分たちのくらしと地域社会との結びつきについて理解を深めることをねらいとしている。社町の商業区域は昔からの商店街と郊外型のショッピングセンター、大型の量販店が混在している地域であり、最近では24時間営業のコンビニも複数進出してきている。

学習前のプレテストによると、本学級の子どもたちは一人での買い物経験が乏しい。買い物というと休日に車などを使ってデパートや郊外の大型スーパーに行くというイメージが強い。しかし、なぜ大型スーパーを頻繁に利用しているか、その理由を言える子どもは少ない。また、様々な地域から通学していることもあってか、社町の商店の位置や特徴にあまり意識が向いていないし、日常的な食料品の買い物に対する関心も高いとは言えない。一方で、カードなどの玩具を扱う商店やケーキ屋・パン屋など、家族がよく利用する商店の知識は豊富なようである。

そこで、本単元では日常的によく利用されている地域のスーパー「生鮮パワー社店」を取り上げ、商店を考える共通の場として設定した。店名の如く生鮮食料品を中心に豊富な食材や値段の安さ、接客サービスを第一にしているスーパーであり、販売者の努力や消費者の買い物の工夫に関する社会認識を、より深めることができると思われる。また、一方で昔より地域に根付いている個人商店も取り上げる。多くの課題に直面しながらも、個人商店が地域の人々との結びつきや商店同士の協力などを大切にしていることを知ることができる。さらに、わたしたちの消費生活を支えているそれぞれのお店の良さにふれることができる。こうした経験や社会認識が、地域に対する愛着を育てるであろう。

単元のまとめでは、〈お店グレードアップ計画〉とい

う形でそれぞれが未来予測をし、様々な立場に立って議論（コミュニケーション）していく。商店や家族に対し、これからのお店や買い物のあり方を提案することが、地域を支える自分の存在や地域社会に対する意識を高めることにつながると考えたからである。

研究テーマに関わって、社会科部では本年度「社会的コミュニケーション能力の育成」を考えている。コミュニケーション能力といってもその意味するものは広い。これまでの社会科学習で行われてきた見学やインタビュー、調べたことの情報交換といった主に認識を深めるためのコミュニケーション能力と、学習したことを総合的に捉えた上で自分なりの未来像をもち、自分たちがこれからの社会をつくる一員であるという認識に立って議論していくコミュニケーション能力を目指したい。学習したことをこれからの生活や社会に対して生かそうとする意志や態度こそが自分の学びをひらいていくと捉え、地域社会の中の自分を見つめながら生活していくことにつながると考えた。

実際の指導に際しては、本校社会科の基本的な学習過程「問題にふれる」－「問題について調べる」－「問題への関わり方を考える」に即して、めあての系列を「買い物のようすについて話し合おう」－「地域にあるスーパーや個人商店の秘密を調べよう」－「お店グレードアップ計画を提案しよう」と設定した。第一次では、身近な問題として考えられるように、消費者の立場で買い物調べをして消費生活の特色を捉える。第二次では、商店について考える共通の場として、スーパーと個人商店に焦点をあて、実際に商店の見学や店員さん、お客さんへのインタビュー活動を取り入れる。消費者・販売者の立場や様々な商店の比較・類推などから、商店の秘密について話し合いを行う。その際、働いている人が生活の変化や消費生活の変化とともにどんな工夫をしてきているのかについて考えさせたい。

そして、第三次では、第一次、第二次で調べたことをもとに、消費者・販売者の両方の立場から地域の商店についてどんな未来像が考えられるか判断させたい。保護者の意見を取り入れながら消費生活のあり方を考えたり、個人商店主の願いや思いを聞いたりする活動を取り入れ、学級全体で〈お店グレードアップ計画〉として練り上げる場とする。また、単元を通して、話し合いの場をより多く設定するとともに、たえず自己の学習の進み具合を振り返り、メタ認知・メタ評価の能力を育てるよう工夫した。そのことが、商店に対する見方や考え方を広げ、社会認識を深めるとともに、社会の一員として近未来の商店や消費生活について考えることになるものと期待している。

2.2 単元の指導

2.2.1 単元の目標

- 自分や身近な人々の消費生活に関心をもち、地域の商店の様子や働きについて意欲的に調べることができる。
- 地域の人々は品質や価格等を考えて買い物をしていること、また商店はそうした消費者のニーズを考えて販売の工夫をしていることを考えることができる。
- 地域の人々の消費生活や販売活動は互いに影響し合う関係にあり、他の地域ともかかわりがあることを理解する。
- 自分の学習を振り返る中で、学習の見通しをもったり内容や方法について考えたりすることができる。

2.2.2 単元計画(全19時間)

基本的な学習過程	めあて	学 習 活 動	教師の働きかけ	関連資料
<p>問題にふれる</p> <p>第一次</p> <p>4時間</p>	<p>買い物のようすについて話し合おう</p>	<p>○お店や買い物の様子について話し合う。</p> <p>(課外) 買い物調べ</p> <p>○わが家の買い物グラフをつくり、その傾向を知る。</p> <p>(課外) 社町のお店マップ作り</p> <p>○クラスの買い物グラフや家の人の話から買い物について話し合う。</p> <p>○スーパーがよく利用されていることをつかみ、その秘密を予想する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初めておつかいをしたことや日頃の買い物の様子について想起させ意欲づける。 ・出てきたお店の名前や位置、扱っているものなどを地図で示すことにより、消費者の大まかな動きに注目させる。 ・保護者に買い物調べの協力を依頼し、子どもたちからは普段見えにくい買い物の様子について気づくようにする。 ・各自の買い物調べをもとにクラスで1つの表に表すことで買い物の傾向をつかませる。 ・突出したスーパーマーケットの利用に注目し、その人気の秘密について予想を出し合うことで、見学の視点や見通しをもたせる。 	<p>社町中心部地図</p> <p>買い物グラフ</p> <p>クラスの買い物グラフ</p>
<p>問題について調べる</p> <p>第二次</p> <p>10時間</p>	<p>地域にあるスーパーや個人商店の秘密を調べよう</p>	<p>○スーパーの見学に行く計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問内容, 方法, 見学のやり方 <p>◎スーパーの見学や取材をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーの工夫や働いている人の様子 <p>◎スーパーの秘密についてわかったことをグループでまとめ、話し合う。</p> <p>(課外) お店紹介コーナーの設置</p> <p>○その他のお店では、どんな秘密があるのか予想する。</p> <p>◎近くにある個人商店の見学や取材をする。</p> <p>◎これまで調べてきたことをまとめ、それぞれのお店の秘密について話し合う。</p> <p>(本時)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調べる視点やグループ内での分担を決める。インタビューのし方を実演、確認しておく。 ・店の人や買い物客にインタビューできるよう事前に依頼をしておく。 ・見つけた秘密について、働いている人やお客さん、お店の工夫、苦勞などの観点を設けてまとめていく。 ・スーパーがこんなに便利なら他の店はいらないのではと投げかけ、その店独自の良さに目を向けさせたい。 ・商店街の中の肉屋、駄菓子屋、饅頭屋、社町の特産品を扱う店など12件を取り上げ、スーパーでの見学を生かして取材させる。 ・スーパーと比べる中で、その店ならではの良さや店の苦勞、こだわりに注目させる。 	<p>スーパー写真</p> <p>社商店街地図</p> <p>商店街写真</p> <p>お店紹介コーナー</p>
<p>問題へのかかわり方を考える</p> <p>第三次</p> <p>5時間</p>	<p>お店グレードアップ計画を提案しよう</p>	<p>○お店グレードアップ計画づくりをする。</p> <p>◎計画を提案し、検討をする。</p> <p>○お店グレードアップ計画の練り直しを行う。</p> <p>○計画の再提案と討論を行う。</p> <p>(課外)</p> <p>スーパーや商工会に提案し、感想を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの社会を考えて、お店へのリクエストプランとして未来予測を行う。 ・お家の人の意見もしっかりと取り入れることで消費者のニーズにも目を向けさせる。 ・主婦、子ども、お年寄り、体の不自由な人、単身赴任の人などいろいろな立場に立って吟味する。 ・最終的に承認されたものを、3年1組お店グレードアップ計画としてスーパーや商工会に提案し、それに対する感想をビデオなどに収めて本単元のまとめとする。 	<p>お店グレードアップ計画書</p> <p>スーパーや商工会の方の感想</p>

2.3 本時の学習 (第二次 第10時)

2.3.1 目標

- 個人商店の秘密について情報交換することを通して、スーパーとは異なる個人商店ならではの良さを考えることができる。
- 商店は利用するお客さんの願いを取り入れながら販売の工夫をし、わたしたちの生活を支えていることを理解できる。

2.3.2 展開

学習活動	教師の働きかけ	予想される子どもの活動や思考 ☆は評価の観点
1. 前時の学習を思い起こし、本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ○社商店街の見学に行ったことを思い出させ、自分なりに見つけた個人商店の秘密を振り返らせる。 ○本時のめあてを子どもたちと確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに秘密をまとめたカードを見返している子。 ・ノートやワークシートで予想を確かめている子。
地域にあるスーパーや個人商店の秘密を発表しよう		
<p>2. 自分が見つけた秘密を発表する。</p> <p>3. スーパーと違う個人商店ならではの良さについて考え、話し合う。</p> <p>4. 「お店」とはどんなところなのか考える。</p> <p>5. 次時の課題について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○視覚的にわかりやすいよう、個人でまとめたカードを示しながら発表させることで、全員に共有させる。 ○調べてきた秘密を比較したり、関係づけたりしながら、意見交流が進むように社商店街の平面図や写真を提示する。 ○同じ考えの子にはつけたしや確認をしたりしながら進める。 ○個人商店の秘密について、観点や項目ごとに板書する。 ○意見の出にくい場面では、秘密一覧を参考に指名していく。 ○スーパーとの違いについて聞いてみることで個人商店ならではの秘密を考えるきっかけにしたい。 ○スーパーの秘密と重なる部分が多いことや、買い物調べのグラフ、お店マップに個人商店が少なかったことからお店はスーパーだけで十分ではないかなど、子どもたちの考えをゆさぶる。 ○適宜、グループでの相談の時間を取り入れる。 ○プレテストでのお店の捉え方「いろんなものを売っているところ 17人、物を買うところ 7人、お金を使うところ 1人、わからない 2人」を紹介する。 ○これまでの学習で捉えたお店のイメージマップを振り返らせ、「お店」とはわたしたちにとってどんなところなのか考える。 ○学びが深まっている点をおおいに誉める。 ○これからのお店や買い物について、こうあって欲しいと思うことはないか投げかける。○ステラパークグレードアップ計画も進行していることを伝え、意欲づける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京屋はすべて手作りで、作り方も教えてくれる。 ・藤野のお肉屋さんには、スーパーよりもいいお肉を置いたり、その場でコロッケなども揚げてくれる。 ・肥田商店は子どもが買いやすいように 10 円、20 円のお菓子がたくさんある。消費税もとらない。 ・おとしよりがよく来ていて、一人一人を大切にしている。 ☆調べた秘密を発表したり、友達の考えと比べたりしながら聞いているか。 ・個人商店を利用している人はおとしよりの方が多い ・個人商店はスーパーにはない物を売っている ・一人ひとりと話をしたりして、売っている。 ・歩いてくる人も多い。 ・歴史がすごく古い。 ☆スーパーの秘密と個人商店の秘密の共通点と相違点を考えようとしているか。 ・自分が書いたイメージマップを見返している子。 ・お店はただ物を売り買いするだけにとどまらず、地域の人や消費者の気持ちを考えていることに気づいている子。 ・お店にもいろいろなお店があり、わたしたちのくらしを豊かにしていることに気づく子。 ☆最初の「お店」のイメージから見方や考え方が広がっているか。 ・ステラパークの時のように自分の考えを提案したいと意欲的な子。

(高岡 昌司)

3. 社会認識の成長過程とその評価

ーイメージマップの分析を手がかりにー

3.1 学級全体の社会認識の成長

学級全体の社会認識の成長を捉えるために、3度にわたりイメージマップを書かせ、その内容分析する方法を採用した。イメージマップは「お店」という用語のもとで連想する内容を自由に、関連用語として書かせる内容とした。

最初のイメージマップ作成は、単元の学習の初めである。学習以前の店に対するイメージを把握することを目的とした。次はスーパーを見学した後に書かせた。3回

目のイメージマップは、商店街の見学の後に書かせたものである。

最初のイメージマップは黒鉛筆で書かせた。そして次はそのイメージマップを見ながら赤鉛筆で書き加える方式をとった。このことによって、子どもに自分の店に対する認識内容を、メタ認知させるためである。そして、3回目では、その上に他の色鉛筆で書き加える方法をとった。そのことにより、子どもは自分の認識内容の発展を確認しながら学習していくことができるようになる。

このイメージマップを分析したのが次の表1である。

表1 学級全体の社会認識の成長：「お店」との関連で記述されている内容

	販売品目の羅列			品物の質と品揃え			広告			価格			個人商店の特色			消費税			仕入・接客の貿易工夫			お金・利益・給料			店の施設・衛生						
	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③				
児童	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
A・S	○	○	○			○	○	○		○	○				○			○												○	○
U・H			○			○									○			○	○	○							○	○		○	○
O・K	○	○	○	△	○	○									○						○	○	△	△	○						
K・N	○	○	○			△									○			△			△										
K・T	△	○	○																												
T・T	△	○	○									△	△																		
N・D	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○				○																
H・K	○	○	○		△	△	△	△													△	△	△								
F・K	○	○	○												○			○			○	○							○	○	
F・U	△	○	○	△	△	△																									△
M・S	○	○	○		○	○																									
O・M	○	○	○		○	○																									
S・N	○	○	○			○															△	○									
T・M	○	○	○		○	○									○						△	○									
F・A	○	○	○		○																	○						○	○		
F・U	○	○	○		○	○															△										

(備考)

- 1) ○：その項目について記述している。△：その項目について記述しているが不十分な記述である。
- 2) ①, ②, ③は、次の通りである。
 - ①単元展開前のイメージマップ（1回目のイメージマップ）分析
 - ②第2次5時 スーパーの見学後のイメージマップ（2回目のイメージマップ）分析
 - ③第2次10時 商店街の見学後のイメージマップ（3回目のイメージマップ）分析

この表1から次の内容が読みとれる。

- i) 子どものお店に対する認識内容は、まず、商品である。多くの子どもが、店で売られている商品名を次々と並べていくイメージマップを描いている。
- ii) 商品名の記述を書き終わった段階で、次には、品物の質や品揃えに関心が向いている。この認識の深まりは、大半の子どもに見られる。
- iii) スーパーや商店街見学の成果として、以後のイメージマップでは、店の接客の工夫に気付いてきている。
- iv) スーパーの見学後のイメージマップでは、認識内容の顕著な発展は見られなかった。それに対して、商店街の見学後のイメージマップでは、「個人商店の特色」に代表されるように認識内容が一気に深まったり広がったりしている。これは、スーパーの見学方法と商店街の見学方法との違いから生じたのだろうか。それとも、比較対象を持ち得たことによる認識内容の定着からなのだろうか。今後の検討課題である。
- v) 広告、価格、仕入・貿易、消費税、お金・利益・給料、店の施設・衛生については、3名前後の子どもがイメージマップに書いているにすぎない。このことから、これらの内容が授業で行われていたことはわかる。しかし、認識内容として多くの子どもには定着していないと推測できる。
- vi) 第2次5時のスーパーの見学後のイメージマップでは、接客の工夫に関する認識内容が定着していることがわかる。
- vii) 第2次10時の商店街見学後のイメージマップでは、個人商店の特色についての認識内容が、確実に定着していることがわかる。

3.2 個性的な社会認識の成長

個性的な社会認識が成長している子どもの成長過程と概念を整理してみよう。

3.2.1 A・S児の成長過程

単元展開前のイメージマップに見られる概念

売り物 - 食べ物 - やさい - にんじん - 水 - 土 - たね
- 畑, 飲みもの - ソーダー - たんさん飲りょう

第2次5時 スーパー見学後のイメージマップに見られる概念

コーナー - 魚のコーナー - 人 - 早い, 安売り - ちらし - 家でえらべる, (畑) - とれたて - 新せん - くだ物 - ビタミン - いちご - すいか - 大きい - 重い, (食べ物) - パン - 小麦こ -, (のみ物) - オレンジジュース - オレンジ - あまい

第2次10時 商店街見学後のイメージマップに見られる概念

商店街 - 個人商店 - 近い - 安い - しょうひぜい, (個人商店) - 三木屋 - 毎日つかう物, (個人商店) - ふじ本 - おとしよりがもっていないものを売っている - このごろおきゃくさんがこない - 来たら大切に扱う, (個人商店) フラワー森本 - 花をよく売っている - 70しゅるいい上

A・S児は、学習以前には、店に対して商品を買っている程度のイメージしか持っていなかった。それが2回目のイメージマップでは、スーパーの安売り、価格に着目したり、スーパーのコーナーに着目して、店の人の工夫の認識ができたりしている。さらに、3回目のイメージマップでは、個人商店の品揃え・接客の工夫・問題点なども認識できるようになっている。

こういった認識内容の成長から、A・S児は、この単元で目標としていた学習内容を習得していることがわかる。

3.2.2 U・H児の成長過程

単元展開前のイメージマップに見られる概念

商売 - 金 - 給料 - 安い - デフレ - 貿易 - 外国 - 輸入
- 高い

第2次5時 スーパー見学後のイメージマップに見られる概念

店員 - 笑顔, スーパー - 広い - ちゅう車場 - 車 - 速い, 工夫 - お客様の気持ちを考えて - もうかる - 給料 - うれしい - ボーナス - 夏 - くさる

第2次10時 商店街見学後のイメージマップに見られる概念

(くさる) - 新しい商品 - しんせん - 地元 - 社 - もも - 特産物, (社) - やしろの森 - めじろカード - ポイント - 楽しい, (速い) - 品ぞろえ - 工夫 - スーパー - 店長, (笑顔) - 客 - 親切 - 個人商店, (デフレ) - 日本 - 天皇 - 小泉 - せいじ

U・H児は、商店で売っている商品や品揃え等にはこだわらないで、最初から、給料、デフレ、貿易などを店の概念と結びつける個性的な認識をしている。2回目のイメージマップにおいても、もうかる、給料とスーパーの接客の工夫を結びつけるなどの認識を示している。3回目のイメージマップでは、デフレ・小泉・政治、商店

街のカード作戦などに関心を示している。

こういった個性的な問題意識をもった子どもは、教師がこの子の個性を伸ばしていく方向での指導をしていけば、発展学習としての学習の進展は大いに進んでいくと判断できる。

3.3 子どもによるメタ評価

子どもにメタ評価をさせるために、自分の書いた最初のイメージマップを見ながら、2回目のイメージマップの分析をする説明文を書かせた。その問いかけと子どもの説明文の例を取り上げてみよう。

3.3.1 U・H児のメタ評価

3年「わたしたちのくらしと商店」

3年1組2番 氏名 U・H

1. 最初に書いたイメージマップと2回目にしたイメージマップをくらべて思ったことを書きましよう。

A 一回目に書いたイメージマップは「お店→商売」というふうでしたが、2回目に書いたものは「お店→工夫」などと、社会で何時間も勉強したことがとても生かされていました。それから、もう一つあります。一回目はやっているうちにどんどんお店からはなれていました。でも二回目になるとずっとお店というテーマをたもっていました。勉強するといういろんなものに表れるんだなあと思いました。

2. どうして1のようになったと思いますか。その理由を考えてみましょう。

B 社会の時間に一生けんめい考えたり、発表したりしたこととスーパーの見学にいった時に、インタビューのことだけをノートに書くのではなく、歩きながら気づいたこともノートにメモしていたからだと思います。

3. 友だちのイメージマップとくらべて、自分のイメージマップでいいなと思うところやもったつけたほうがいいなと思うところは何ですか。これからどうやってイメージマップを広げていけばいいですか。

C A・S君は何のしゅるいかわからないけど、色でしゅるいをわけてかえているからいいと思った。ぼくもしゅるいわけして色をかえたいと思いました。でも、中身はぼくのほうがよかった。

U・H児は、自分のお店に対する認識が「お店→商売」から「お店→工夫」に変わったことが勉強の成果であると評価している。また、1回目はお店に焦点化して勉強できなかったのに、2回目にはテーマをお店に定めて、勉強ができたことを評価している。

また、自分のこのような成長の原因を、「考えたこと」、「見学やインタビューをしたこと」、「歩きながらメモを取ったこと」の成果として認識している。

このU・H児のメタ評価は、自分の認識の変化の原因にまで言及していて、相当高いレベルでのメタ評価ができてしていると判断できる。U・H児の場合には、このメタ評価活動をすることによって、自己の認識内容の定着一層確実にしていると判断できる。

3.3.2 F・U児（前記表最下段の児童）のメタ評価

3年「わたしたちのくらしと商店」

3年1組2番 氏名 F・U

1. (略)

A 最初のイメージマップより、後のイメージマップの方が何倍も書いていた。最初のイメージマップとはちがうことがいっぱい後の方に向けた。後の方で赤い字で考えて、こんなにいっぱいかけるとは、ぜんぜん思っていなかった。

2. (略)

B ぎんビルにいて、そして、ぎんビルのことをみんなで話しあったから。それと、ぎんビルにいて、よく考えて、それをみんなに言ったから。

3. (略)

C 友だちのいいところは、黒い字より赤い字の方が多かった。それは、なぜかという、友だちは、ぎんビルにいて、よく見て、よく聞いていたからだと思います。

F・U児は、自分の認識内容が量的に大きく成長していることを、自分の言葉で表現できている。また、「みんなで話しあったこと」、「よく考え、みんなに言った」ことが、認識の成長の原因であることを、明確に捉えている。メタ評価がよくできている児童であると判断できる。

ここでは2例のみを取り上げて検討したにすぎないが、この種のメタ評価をさせることの有効性は確認できた。多くの子どもはメタ評価がまだできていない。こういったメタ評価が、どの子どもできるように指導していくことが、今後の課題である。

(岩田一彦)

4. メタ認知の成長過程とその評価

4.1 分析・評価の方法

小学校3年生段階で子どもが自己の社会認識をメタ認知していくというのは、なかなか難しいものがある。今回は、授業後のふりかえりカード（以下に示す質問項目）をもとにそれらを分析していくことにした。

- ①今日の学習でわかったこと、なるほどと思ったことを書きましょう。
- ②これまでの学習で、よくわからないこと、疑問・質問・不思議に思っていることを書きましょう。
- ③それらをこれからどうやって解決していきますか。
- ④次の学習では、どんなことを調べたり、話し合ったりしますか。
- ⑤今日の学習は楽しかったですか。楽しくなかったですか。

以下に、学習が進展するにつれて子どもたちの中にどんなメタ認知が形成されていったのかを、学級全体の学びと個々の学びが特徴的な子どもを取り上げて見ていくことにする。

4.2 学級全体のメタ認知の成長

ここでは、学習の進展とともに、学級全体のメタ認知の成長がどのように変化していったのかを上述のふりかえりカードの項目①～④の記述内容をもとに、下の表2のようにまとめてみた。

まず、第3回目までの記述から見てみよう。①「わかったこと」についての記述は、プレテストから第3回目まではスーパーマーケットに関する記述がほとんどを占める（「買い物はスーパーによく行っている」、「スーパーの秘密がよくわかった」等）。それにもなまって②、③の項目に関する記述も「なぜ人はスーパーによく行くのか」、「なぜ広告を出すと人が集まるのか」といった疑問や、「実際にスーパーに行き調べる」、「お店に行く人

にインタビューする」という調べ活動の方法ができています。また、この記述からは読みとりにくいですが、おそらく各時間の学習のなかで疑問に思ったことが学級全体で話し合われたものと思われる。これら一連の過程では、子どもたちはスーパーマーケットに関する社会認識や疑問の解決を、調べ活動をもとに友だちと話し合うなかで獲得したり解決していったと言っている。ただ、これをもってメタ認知の成長と見るのかどうかについては、今後の研究課題として残されよう。

次に、第4回目から最後まで記述について見ていくことにする。特徴的なのは、第4回目の記述から個人商店（昔からの商店街）に関する記述が大半を占めていることである。これは、単元展開のなかで学習内容がスーパーマーケットから個人商店の方に変わったためである。ここでは、それまでに学習したスーパーマーケットに関する認識と比較しながら、個人商店を活性化させるにはどうすればいいかという方向に流れている。それにもなまって、①「わかったこと」②「疑問・質問・不思議に思ったこと」④「どんなことを調べたり話し合ったりするか」の記述も、個人商店の秘密とそれに関する疑問、そしてそれに関する話し合いの後にわかったことという順番で現れている。③「どう解決していくか」の項目に関しても、これまでのスーパーマーケットについての調べ活動で培った方法を駆使しながら、それをもとに話し合いが行われたことがうかがえる。これらのことから、第4回目以降の学習においても社会認識や調べ方、授業での話し合いにおける学級のメタ認知の成長はある程度その形を見せていたのではないだろうか。

しかし、今回の研究では、メタ認知の成長の度合いをふりかえりカードのみによって検討したので、はっきりとした成果を読み取ることはできなかった。今後は、どんな評価道具や評価項目でメタ認知の成長を捉えるのか、慎重な検討がなされるべきであろう。（渡 信雄）

表2. 学級全体におけるふりかえりカードの主な記述例

	①わかったこと	②疑問・ふしぎに思ったこと	③どう解決していくか	④どんなことを調べたり話し合ったりするか
プレテスト	<ul style="list-style-type: none"> ・買い物はスーパーによく行っている ・コンビニにはあまり行っていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ近所のお店にはあまり行かないのか ・どうしてスーパーを選んだのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・人に聞く ・そのお店に行く人にインタビューする 	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーと個人商店の違いを予想したい ・スーパーにはどんな商品が売っているのか ・なぜスーパーに行く回数が多いのか ・個人商店に行く回数が少ないのはなぜか
第1回目	<ul style="list-style-type: none"> ・安売りをしているから人が集まるというスーパーの秘密 ・スーパーはよく広告を出しているということ 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンビニでも値引きはあるのになぜスーパーに行くのか ・なぜ広告を出すと人がたくさん集まるのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・お店の人に聞く ・実際にスーパーに行ってみる ・おうちの人に聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ安売りをしているのか話し合いしたい ・スーパーの秘密について ・なぜ個人商店にあまり行かないか
第2回目	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーの秘密がよくわかった ・商品の陳列状況 ・商品がそこにあるという看板 	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーの工夫はコンビニでもしているのになぜスーパーに行く人が多いのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの意見を聞く ・わからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・まだわかっていないスーパーの秘密 ・スーパーの広さ
第3回目	<ul style="list-style-type: none"> ・個人商店も安売りをしていること ・個人商店は違う物を売っていること ・スーパーと個人商店は全然違う 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人商店の秘密は何だろう ・個人商店にはスーパーにない物があるのか ・個人商店はなぜ人気がないのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューする ・個人商店に行ってみる ・ひださんに聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人商店の秘密を話し合いしたい ・個人商店はなぜあまり名前を知られていないのか ・なぜ個人商店をあまり利用しないのか
第4回目	<ul style="list-style-type: none"> ・個人商店はそれぞれ特徴のある物を売っている ・サービスは個人商店の方がいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街にはなぜお年寄りの利用が多いのか ・商店街はなぜあがるのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・お店の人に聞く ・みんなで考えたりする ・みんなで情報交換をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の秘密をもっと話し合う ・もっと詳しく品揃えやサービスのことを話し合いしたい ・商店街のいいところを調べたい
第5回目	<ul style="list-style-type: none"> ・ベンチをおくと休めたりしていい ・お年寄りや体の不自由な人のことも考えなくてはいけないということ 	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街にカートをおくのは本当によいのか ・どうすれば提案するものがちゃんと決まるのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとみんなの意見を合わせる ・お母さんとお店のの人に聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと友だちの意見を聞く ・最後だから提案を決定していきたい ・なぜ個人商店は暗い店ばかりなのか ・まだ決まっていないことを話し合う

4.3 個性的なメタ認知の成長

4.3.1 第三次に着目する理由

単元全体の中で、最も話し合いが白熱したのが第三次であった。第二次で自ら調べたお店をなくしてはいけないと、地域の商店街のこれからについて真剣に考えた。特に、自分が調べたお店へのこだわりは強く、友だちの提案を聞いて、自分の考えを見直そうとする姿勢が目についた。そこで、この第三次のメタ認知活動に着目し、個性的な児童のメタ認知を分析することにしたい。

なお、ふりかえりカードだけでは、個々の認識と学級全体の認識が見えにくいため、第二次終了時での学級全体の意見をはじめに掲載しておく。

＜学級全体で出された個人商店のひみつや良さ＞

・おまけがある ・消費税をとらない ・10円ぐらいのものもあつまっている ・品数は少ないが、スーパーにはないようなものがある ・手作りの商品を売っていたり、作り方や使い方などの講習会のようなものがあつたりする ・歴史が長く、昔からのおつきあいが多く、特におとしよりの利用が多い ・スーパーよりも朝早くから店をあける ・一人ひとりのお客リストがあるなど一人ひとりを大切にしている ・ゆったりと世間話をしながら買い物ができる

4.3.2 H・A児のメタ認知

H・A児の第三次のふりかえりカード(No.4.5.6)から、「①きょうまでの学習でわかったこと、なるほどと思ったことを書きましよう。②これまでの学習でよくわからないこと、疑問・質問・不思議に思っていることを書きましよう。」の記述を抜き出すと、以下ようになる。

No.4 (個人商店の人気のひみつ予想後)	①商店街のひみつで、あきはちゃんのこと、せまいから見つけやすい。 ②予想の全部
No.5 (個人商店の調べ学習後)	①個人商店のひみつが10個以上見つかった。1人1人のお客さんを大切にしている。②ぶつだんはなんであるの。
No.6 (1回目のグレードアップ計画検討後)	①お年寄りがよくきているのがわかったから、一つベンチを提案できた。②安全計画の賛成の人はおかしい。ムダになるし、やめたほうがいい。

H・A児は個人商店のひみつについて、「消費税をとらない」、「レジが一つ」、「スーパーとはちがうものを買っている」という予想をしていた。話し合いの中で「個人商店のひみつはせまいから買い物がしやすい」という友達の意見に賛同し、「レジが一つ」という予想に自信を深めた(No.4)。次に、調べ学習後の話し合いの結果、「ひみつが10個以上見つかった」と自分の気づきが予想と合わせて増えたことを確認し、「1人1人のお客さんを大切にしている」ということに気づいている(No.5)。

同カードの「⑤今日の学習は楽しかったですか。」の項には、「見学はいろいろな質問ができたり、確かめたりできるから楽しい」とも書いている。見学によって自分の学びが深まったことを実感できたと思われる。

お店グレードアップ計画では3つの計画を提案したが、「人気のあるものがたくさん売れるとはかぎらない」、「商品をふやしても売れないとお金がよけいにかかる」、「スーパーと同じことをしては売れない」という意見から自分の計画を見直した。最終的に、「お年寄り」に着目し、「ベンチをおく」計画を再提案した(No.6)。自分の提案を直接批判されたわけではないが、話し合いから自分の計画を見直すメタ認知を深めたと言えよう。

4.3.3 S・N児のメタ認知

S・N児については、お店グレードアップ計画の最初の提案と、話し合いと練り直しを経た最終の提案の違いに着目し、メタ認知の成長を分析する。

まず、最初の計画では、「商店街全体がひとつのスーパーみたいなものと商工会の人が言っていたから、カートを使って買い物するのはいいアイデア」とカートやベンチをおく計画を提案した。検討の中で、「カート計画は店がせまいし危ない」という意見を聞き、自分の考えを見直した。他方で、「ベンチ計画は商店街が広いし、いろんな人がゆっくりと買い物できるので役に立つ」という友達の意見から、自分の考えに自信を深めている。

最終の計画では、クラスの話し合いで出された、「個人商店の良さをもっとせん伝したら、お客さんによくわかって来る人がふえるし、そのお店にしかないものとかもわかる」という意見に賛同し、自分の考えよりも友達の「かんばんなどを明るくして、そのお店のよさをせん伝える」により高い価値を見出している。話し合いの中での友達の意見から、自分の考えを見つめ修正したり、友達の意見を取り入れたりするなど、自分の認知を対象化してとらえていることがわかる。

4.3.4 考察

抽出した2名の児童は、いずれも話し合いを重ねるたびにそこで出された意見を参考にして、自分の認知を見つめ直し、発展拡充させている。しかしながら、そのことを児童は十分に自覚していない。その原因の一つとして、ふりかえりカードの不備が指摘されよう。今回の質問項目では、最初の考えと話し合いを経ての考えとを比べるという視点が明確でなかったため、自己の認知を反省的に吟味する機会を十分に保証できなかった。今回は児童のノートや授業ビデオを子細に観察分析することで、ふりかえりカードの不備を補った。その結果、3年生の児童でもメタ認知的活動を行っていることが明らかになった。今後、ふりかえりカードの項目や質問のし方を工夫すれば、もっと容易にメタ認知を促すことができるのではないと思われる。(高岡 昌司)

5. 結

今回の研究では、本継続研究の基本仮説のうち、特に社会科固有の認識方法に関する第2仮説の精緻化と検証に焦点を当てた。すなわち、社会科ならではの学びを促す方法として、子どものメタ認知とメタ評価（自己評価）に着目し、学習過程にメタ認知・メタ評価活動を組み込むとともに、子どものメタ認知・メタ評価の育ちを把握する方法の開発に努めた。

具体的には、第一に「ふりかえりカード」を利用して、子どもたちに小単元の区切りごとに自己の学びを反省させる方法をとった。このカードは決して目新しいものではなく、本継続研究では当初より利用してきているが、それを今回はメタ認知・メタ評価の視点で見直し、再利用を図った。子どもたちはカードの問いに回答する過程で、自己をリフレクトし評価する。つまり、ふりかえりカードへの記入が、次の自己の学びを方向づけ、意欲づけると考えたのである。

第二の試みとして、「商店」に関するイメージマップをウェビング法によって描かせたことが挙げられる。同じ用紙を使い、各回ごとに鉛筆の色を変えて記入させれば、記入者自身に自己の学びの度合いや関心・理解の方向性を把握させることが可能になる。また、2回目以降のイメージマップには、前回のマップと比較して何が変わったのか、なぜ変わったのかを文章で記述させ、意図的にメタ評価を促した。なお、ふりかえりカードにしるイメージマップにしる、それが教師による子どもの評価や授業評価につながることは言うまでもない。

授業設計については、小学校第3学年の内容「地域の販売に関わる仕事」を取り上げ、全19時間の単元「私たちの暮らしと商店—お店グレードアップ計画を提案しよう」を開発し実践した。本共同研究グループでは、註3)に示すように8年前にも同様の単元を開発したことがある（岩田一彦他, 1995）。それは、「買い物をもっと楽しむ方法」のタイトルが示すように、あくまで賢い消費者という視点から、商店の機能や働く人の工夫に迫ろうとするものであった。今回は、そうした人々の工夫にもかかわらず沈滞している地域の商店街を、どうすれば活性化できるのか、子どもたち自身に調べ活動と話し合いを通して提案させるところに主眼を置いた。

研究の成果を概括すれば、以下ようになる。まず、提案型の単元計画は子どもの関心・意欲を促し、社会認識を成長させることが明らかとなった。また、イメージマップの重ね書きの手法は、子どもの社会認識の成長を把握するのに有効であり、さらに文章で説明させればメタ評価につながることを確認された。ふりかえりカードの使用についても、有効性が改めて検証された。そして、3学年段階の子どもにもメタ認知・メタ評価が十分可能なことが判明した。

しかし、課題も残された。まず、社会認識やメタ認知・メタ評価に個人差があるのはやむを得ないとしても、今回の研究ではわれわれの側にメタ認知・メタ評価に関する共通理解が十分にできていなかった。その結果ふりかえりカードの質問項目の立て方に不備が指摘され、記入の時期についても、所期のねらいと実践との間に乖離が見られた。次にメタ認知・メタ評価に関して、明確な視点と方法を提示することができなかった。今回は見切り発車により試行錯誤で分析せざるを得なかったが、その方法を確立するのが当面の課題である。（原田智仁）

註

- 1) 草原和博他, 社会科固有の学びを育てる授業構成と実践分析(I)—第5学年「自動車工業と私たちの暮らし」を事例として, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター) 13巻, 2001, 47-59
- 2) 原田智仁他, 社会科固有の学びを育てる授業構成と実践分析(II)—第6学年「『現代』とはいつのこと?」を事例として, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター) 14巻, 2002, 101-113
- 3) 代表的な研究を挙げれば以下のようなものがある。
 - ・岩田一彦他, 子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析—3年「社町の桃づくり」を事例として, 学校教育学研究, 5巻, 1993, 143-161
 - ・岩田一彦他, 子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(II)—小学校4年「山地の人々の暮らし—安曇野(穂高町・豊科町)に湧く良質で豊富な水を生かしたくらし—」を事例として, 同上紀要6巻, 1994, 67-82
 - ・岩田一彦他, 子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(III)—小学校3年「ひとびとの暮らしと商店—買い物をもっと楽しむ方法—」を事例として, 同上紀要7巻, 1995, 81-94
 - ・原田智仁他, 子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(IV)—小学校4年「菊づくりに生きる沖繩の人々」を事例として, 同上紀要8巻, 1996, 63-74
 - ・原田智仁他, 子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(VI)—小学校4年「嬉野台地の開発」を事例として, 同上紀要10巻, 1998, 19-31
 - ・原田智仁他, 子どもの関心・意欲を育てる社会科授業構成と実践分析(VII)—小学校4年「低地の人々の暮らし—海津町—」を事例として, 同上紀要11巻, 1999, 39-51
- 4) 社会科授業におけるメタ認知・メタ評価の理論については、以下の文献を参考にした。
岩田一彦, 社会科固有の授業理論・30の提言, 明治図書, 2001

(2007.31 受稿, 2002.9.17 受理)